

ごあいさつ

日本放射線影響学会の第1回の研究発表会は1959年10月でした(演題数86)。1970年(第13回)は氣駕教授のもとで昭和大学で行われました(演題数138)。今回は第34回大会です。約20年後同じ昭和大学でお世話させていただくことを光栄に思っております。

広島・長崎の原爆から46年、影響学会の発足から34年になります。その間、数多くの研究がなされ、高線量に対する放射線の影響についてはある程度分ってきたのではないか、と言われています。しかし低線量の被曝についてまだ分らないことも多く、放射線は本当にどのくらい危険なのか、そして人類の未来の遺伝子にどう影響するのか、がいま重要な問題の1つであるように思われます。

本大会ではこのような点をふまえて、分子レベルから遺伝、疫学、放射線の価値観の話まで含めた特別講演やシンポジウムなどが企画されました。

特別講演としては、梅垣先生は「放射線と価値観」について、重松先生は広汎な疫学調査の話を、Dr. Mitra は今話題のヒトの DNA repair gene の講演をされます。

シンポジウムの一つは、滝沢、佐伯先生による「公衆被曝線量」について、他の一つは「放射線の遺伝的影響」というテーマで、近藤先生の司会で行われます。その中で Dr. Neel の「原爆の遺伝的影響」が講演されます。

また、本年の新しい試みとして教育講演が毎朝行われます。森内先生は「吸収線量」、松平先生は「ICRP の勧告の生物学的根拠」、石崎先生は「がん抑制遺伝子」の話をされます。

一般演題は257題です。そのうち、遺伝子、突然変異、修復など遺伝子に関するものが約80題でほぼ1/3を占めています。がん関係が約40、感受性、増感・防護、環境問題がそれぞれ約30題あります。その他、原爆15、活性酸素15、放射光12、低線量11、などについて発表されます。

いずれも興味あるテーマが含まれ、実りある大会となることと思います。

多数の皆様のご参加と活発なご討論を期待しております。

大会会長 菱田 豊彦